



TITLE:

ブータンの旅(翻訳)

AUTHOR(S):

Morris, C. J.; 古川, 彰; 月原, 敏博

CITATION:

Morris, C. J. ...[et al]. ブータンの旅(翻訳). ヒマラヤ学誌 1996, 6: 111-125

ISSUE DATE:

1996-05-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/HSM.6.111>

RIGHT:

ブータンの旅 A Journey in Bhutan

C. J. Morris

翻訳 古川彰（中京大学社会学部）、月原敏博（大阪市立大学文学部）

本稿は、C. J. Morris, A Journey in Bhutan, Geographical Journal, vol. 86, no. 3, 1935, pp. 201-217. の全訳である。原文にはブータンの概略図と12枚の写真が添えられているが、ここでは写真は省略した。この報告は、1930年代当時の英領インド関係者のうちでもっともネパールの諸民族に詳しく人物が、ブータン南部へ移住していたネパール系住民と、彼らとブータン人との関係を観察した記録といえる。ここに記されているネパール系住民の移住（入植）の経緯、その生活経済や行政制度・税制、そして彼らとブータン人との間に一種の生態学的な棲みわけが見られたことなどは、現在のブータンが抱える国家的課題の背景を考える上で大いに参考になるが、ヒンドゥー化に伴う死者の葬り方の変化や各民族・言語の系統についての記述には著者の人類学的素養が生かされており興味深い。

ブータンは東部ヒマラヤにある独立国家である。北と東はチベットに接している。西はチベットのチュンビ県（Chumbi district）に接するが、その風景はエベレスト山への継続的な遠征によって馴染み深いものになっている。また南は英領インドのアッサム州およびベンガル州に接している。東西の最長距離は190マイルであり、南北の幅はかなり変化するが最も広い部分で90マイルある。面積は約18千平方マイル、人口は約30万人と推定されている。

ブータンの山地とベンガルおよびアッサム平原の間の交通は、門または入口を意味するヒンドゥー語のドワール（dwar）に由来するところの、現地でドゥアール（Dooar）と呼ばれる幾つもの山道によっている。この名前は、今日ではこれらの通路によって開かれた平坦地を指すのにも使われている。ドゥアールは集約的な耕作も可能な肥沃な土壌の多い土地だが、アッサム平原とベンガル平原の境界であるスン・コシ川（Sun Kosh）を境に、2つに大別されている。西部ドゥアールすなわちベンガル・ドゥアールは、現在その大部分が茶園となっているが、東部ドゥアールすなわちアッサム・ドゥアールは未だに大部分は原生林に覆われ、ネパールのタライ（Terai）とは全然似て

いない。ブータンの現在の南の国境は山地帯の裾に沿っており、従ってこの国は、所々に残されたほんの数マイル幅の細長い土地以外には事実上平地を持たない。とはいえ、1865年の戦争以前には全ドゥアールはブータンに属していた。地理的に見てこの国はネパールおよびシッキムとはさほど異ならず、それらの国々の東方の延長をなしている。つまりこの国にも深い峡谷や高い山の峰々があり、交通には不便な土地となっている。

ブータンの先住民は、2世紀ほど前にチベットから侵入・移住した軍人たちによって征服されたと考えられている。1774年、東インド会社はブータンの支配者と条約を締結したが、山地住民たちはその後も英国臣民に対して非道な行為を繰り返した。それに対して英国側は幾度かにわたって報復手段をとったが、その度ごとに多くのドゥアールが一時的または永久的に併合されることとなった。例えば、1864年11月には西部すなわちベンガル・ドゥアールのうち11のドゥアールが併合され、その翌年、ブータンが良い態度をとるならば毎年報奨金を与えるという条件のもとで条約が締結された。何年も後の1910年、この条約は修正されその約定によって英国政府はブータンの内政には干渉しないことを約束したが、他方ブータン政

図 概念ボタン

府は外交に関しては英国政府の指導を受けることを容認した。

16世紀中頃から1907年にかけて存在したブータンの政体は、僧侶と俗人信者それぞれの代表であるダルマ・ラジャ (Dharma Raja) とデブ・ラジャ (Deb Raja) による二重支配から成り立っていた。しかし、1907年、ダルマ・ラジャを兼ねていたデブ・ラジャは地位を放棄し、その結果としてトンサ・ペンロップ (Tongsa Penlop、トンサ地方の統治者) であったウゲン・ワンチュック卿 (Sir Ugyen Wangchuk) がブータン最初の世襲のマハラジャに選ばれた。彼は1926年に亡くなり、現在の支配者であるジグミ・ワンチュック卿 (Sir Jig-me Wangchuk, K. C. I. E.) が後を継いだ¹⁾。

ブータンの人々はチベット人にそっくりで、シッキムで話されているのと似たチベット語の方言を話す。人類学的には、彼らはグルン族 (Gurung)、ライ族 (Rai)、リンブー族 (Limbu) のような、ネパールのモンゴロイド系諸部族にかなり近い。しかし後者は現在ヒンズー教徒だがブータン人は仏教徒である。人生のほとんどを僧院もしくは尼僧院で過ごす人が非常に多く、隔離された人口の割合がこれほど大きい例はおそらく他の仏教国には見られないであろう。これらの宗教施設の規模は、ほんの半ダースの僧侶しか住んでいないような小さな路傍の礼拝堂から、約300人を収容できるタシ・チョ・ゾン (Tashi Cho Dzong) の大ラマ僧院²⁾ までさまざまである。

多くの城の守備の歩哨のほかには軍隊はないが、先込め銃とよく鍛えられた鋼をもつ刀の製造で有名なところが国内に数力所ある。

陛下はカリンボンに代理人をおいているが、その人は対ブータン政策に関する在シッキム政務官 (the Political Officer in Sikkim) の補佐でもある。現在この人はラジャ・ソナム・トプゲイ・ドルジ (Raja Sonam Tobgay Dorji、以下ラジャ・ドルジと略す) である。私の旅のためにこまごまとした手配をしてくれたのは彼であり、この国についての多くの貴重な情報を与えてくれた。彼が私のためにしてくれた全てのことについてはどんなに感謝してもしきれない。

ブータンは、おそらく今日世界で最も閉鎖的な国であろう。儀礼目的などで在シッキム政務官が

何度か首都を公式訪問したのを除けば、この国に入国を許されたヨーロッパ人はほとんどいない。1933年、私はインド政府の要請およびマハラジャの招待によってブータンを訪れた。当初、旅行の範囲はネパールからのグルカ (Gurkha) 移民³⁾ が現在ほぼ独占的に居住している国の南部にとどまるはずであった。とはいえ私はハ (Ha) とパロ (Paro) を訪問することを切望した。この訪問について当初は見込みやすだったが、在シッキム政務官のウィリアムソン氏 (F. Williamson) が私の希望をラジャ・ドルジに伝えてくれた結果、この最も興味深い2つの場所を訪れる許可を得ることができた。今回私が辿ったルートの一部は、ツェットランド卿 (Lord Zetland) がベンガル総督だった頃 (当時は Ronaldshay卿) に反対方向へと横断している。後に彼は次のように記している。「われわれがたどったルートの大部分はヨーロッパ人が未だ踏査していないルートだった。しかし、最初の2、3日はほとんど人が住んでいないうっそうとした森のある山々を登り下りするだけで少しも興味深くはなかった。だが、平原に近づくにつれて土地はネパール人によって開拓されていた。(Lands of the Thunderbolt - Sikkim, Chumbi, and Bhutan, London, 1923, p. 246.)」本論文の残りの部分は主にこのネパール人によるブータンへの入植問題に関連しているので、まえおきとして彼の言葉を引用した。なお、ブータンにいる間私はずっと多忙であり、詳細な調査をする機会も手段もなかったことを述べておく必要がある。旅行は全部でほんの2、3週間であり、ほとんど毎日のように移動していたからだ。従って、読者の皆さんには、短期間の非常にあわただしい訪問から得られたうわべだけの印象記として、この報告を理解していただきたいと思う。

サルバン (Sarbhag) 付近の山地帯には、約60年ほど前まではブータン人が住んでいたといわれる。しかし、1870年頃にはブータン人は山地のさらに奥へと少しずつ後退しはじめたらしい。それ以降、第一次世界大戦のおこる2、3年前までは、この地方のほとんどは深いジャングルであり、事実上人は住んでいなかったようである。ところが、1910年頃には最初のグルカの移民がやってきた。これ以前にも多くのグルカがこの地方を毎年訪れ

ていたが、暑さのため彼らは数ヶ月間以上留まることはなかった。彼らは、現在でも大量にあるゴムの木の樹液を採るためにやって来たのだが、一年の残りの間はネパールの自分たちの家にいた。この樹液を採る作業は数年間続いたのだが、やがてアッサム政府が大規模な栽培を開始したため、適切な設備を持たず科学的な方法も知らなかったグルカたちにとって利益のあがる仕事ではなくなった。ブータンのこの地方におけるグルカによる農業と組織的植民の開始は、このときからであると思われる。

彼らのブータンへの移住にはいくつかの理由がある。例えば、私は数人の男たちから次のような話を聞いた。東部ネパールのヤンルップ地方（Yangrup district）では1914年に大変ひどい山崩れがあった。この災害でたくさんの人が全財産を失ったが、ブータンには求めれば得られるよい土地があると聞き、彼らは移住を決めたという。当時ネパールでは、既に肥沃な地域では明白な人口過剰が生じており、人々の需要を支えるのに十分な土地を山地部で得るのは難しい状況が続いていたと思われる。ネパールのタライ（Terai）は、一年のうちほとんどの時期にはマラリアの危険があり、また十分な量の清水を得ることは難しかったため、比較的最近まで入植地としては全然役に立たなかった。しかしながら、現代の研究手法とネパールの歴代マハラジャの努力と莫大な出資のおかげで、このかつて評判の悪かった広い土地は住めるようになり、初期の入植者の多数は今や彼ら自身の国に帰れるようになった。

ブータンのグルカ居住地は、現在主に2つの地域に限定されている。1つは東部すなわちアッサム・ドゥアールの北隣にあるチラン（Chirang）として知られる東部地域、もう1つは西部すなわちベンガル・ドゥアール北方の西部地域である。ここはブータン人にはサムチ（Samchi）、平原の住人にはチャムルチ（Chamurchi）として知られている。この2つの地域はおおよそスン・コシ川によって分けられる。私は最初に東部を訪れることにした。

チランへは、東ベンガル鉄道のラルマニール・ハート（Lalmanir Hat）～ゴウハティ（Gauhati）間の信号停車駅であるコクラジャール（Kokrajhar）

経由で行ける。私がそこに着いたのは1933年3月のある朝の午前4時前だった。こんな時刻に到着することはたとえ最も文明化されたところであっても快適ではない。ガイドを探す気にもならず、コンクリートのプラットフォームで寝て夜明けを待つしかなかったが、とうてい眠れるものではなかった。しばらくして、全く親切にもブータン当局がわれわれの旅のためのポーターたちを送ってくれたことを知った。夜が明けるとすぐにわれわれは埃っぽくかんかん照りの平原へと出発した。ブータンの山地の輪郭はかなり遠くに見えていた。

ブータンの南の国境線沿いの地域は、国境より英国側の数マイルをも含め、全体が帯状の密林地帯となっている。このことはネパールのタライと全く同じで、人里から遠い林間の空き地では大型の鳥獣が多数見られる点でも等しく有名である。そしてまた、1年の大部分の間この地方を人が住めない土地にしてしまう特にたちの悪い蚊が多いことでも有名である。この森林帯の中には開拓地もあり、それらの多くは非常に広い。山地の裾に着く迄にわれわれはいくつかの村を通ったが、それらの村は主にメチ族（Mechi）の住民からなっていた。メチ族は見かけはモンゴロイドで肌が真っ黒なのを除けばグルカとたいして変わらない。実際男たちの多くはネパール語を話した。ただし女たちはこの言語を習得しないようだ。グルカと違うのは荷物の運び方で、メチ族の人は肩にかけた棒に荷物をつるして運んでおり、ネパールで一般的な頭帯を使って運ぶやり方はしない。また、われわれはサンタル族（Santal）が住んでいる2、3の村も見た。この人々は背が低く、非常に肌が黒く、見ためにはややネグロイド系だが、互いに知っている言語がなかったので私には彼らと会話することはできなかった。

ある夜、われわれは森の中で宿泊せざるを得なかったが、そこにはごく小さなレストハウスと、2、3の粗末な小屋があった。そこの人々はやせ衰えて熱病にかかったような様子をしていて。その夜は暑くて風通しが悪かったが、林間の空き地は無数のホタルの光でみちていた。この小さなパトガオン（Patgaon）の開拓地を出発してまもなくすると森は深くなり、最後の18マイルほどの間は

とんど通過不能なサラソウジュのジャングルであった。そこを通過するには2、3の不確かな道を辿る以外になく、水場も一カ所しかなかった。ブータンの国境に着く少し手前になると再び森は開けてきてたくさんの開拓地が現れる。雨期の間この森林帯はほとんど通過不能になるが、山地帯から下ってくる旅は季節を問わずかなりつらいものである。これらの事実注目しておくことは重要である。というのは、これこそがベンガルおよびアッサム平原との文化的交流を妨げてきた大きな原因であるとともに、ネパール人にとっては彼ら自身の国と同じような条件下で生活することが可能になっているからである。また、後述するようにネパール人の集落はどれも北部の集落からも隔離されている。

国境から1マイルほどの森の中に巨大な開拓地があるが、ここがサルバン(Sarbhag)である。サルバンにはチラン県の住民にとってもっとも重要でかつ事実上唯一の市場がある。それは約40の草ぶきの小屋から成り、すべてネパール人で占められている。住民は一年を通してここに住み、農地では稲が作られている。年中、日曜日に定期市(ハート、Hat)が開かれ、この地方の大人のほとんどが定期的に参加している。彼らは山地からオレンジ、ジャガイモ、マスタード、そして相当量の米を持ちよる。彼らはこれらのものを売ったり、山地では入手しにくい塩と交換する。また、私は安い綿製品やネックレス、鏡などを売る露店もたくさん見たし、パラソルの下で景気のよい競売も行なわれていた。オレンジはここでは100個が11アンナ(約1シリング)で入手可能で、私の訪問時の米の市場価格は36ポンドあたり1ルピー(1シリング6ペンス)だった⁴⁾。オレンジの大部分はベンガル人の商人によって輸出されていた。彼らは、これらの様々な市場を直接訪れることもあればそこに代理人を置いていることもある。県名にもなっているチランは海拔約5,000フィートにある。チランは数多くある村の1つにすぎないが、その名前はこの地域の全集落を示すのに使われているわけである。チランには約1,000戸の家があると言われるが、もっぱらネパール人によって占められている。同行したブータン人の役人を除くと、私はこの地域全体でグルカ以外の

民族を見ることはなかった。

ブータン政府はネパール人入植者に対していかなる干渉もしておらず、税金さえ払えば全く自由に生活することができる。それゆえ、整備されつつある村の行政制度はネパールのそれを基礎にしておき、地方の条件にあわせてわずかに修正された程度のものである。個々の村落群にはそれぞれマンダル(Mandal、ネパールではMukhiya)と呼ばれる役人がおり、マンダルは村人自身によって選出されてブータン政府に承認されている。彼は職務上の報酬は受け取らないが、その一方で税金は全く払わなくてよいのである。個々の家の住民は、役人に年間1ルピー4アンナを税金として払うか、そうでなければ6日間の賦役に出ている。ほとんどの人は労働するほうを選び、現金で払う人はほとんどない。政府に賦役を要求されたときは必ずそれを提供しなければならないが、1人1日4アンナが支払われる。家屋に対しては住む男性の数に応じて年に6~9ルピーの税金が課せられる。家畜については年に水牛は2ルピー、乳牛は12アンナ、羊は2アンナが課税される。他の全ての動物は免税される。稲作地の賃貸料は1エーカーあたり年に3ルピーだが、トウモロコシだけが作付けされる耕地は免税される。全ての土地は永久的に保有される。

耕作は、稲作地を除けば、アッサムでジュミン(jhuming、焼畑)として知られる耕作方式によって行なわれている。この方式ではジャングルの一部を切り開いて1シーズンだけ使い、続く4、5年間はまたジャングルにかえす。この方式により広大な土地がだんだんと切り開かれ、多くの貴重な木材が破壊されてしまった。現状では科学的林業はまだ経済的に成立不可能ではあろうけれども、J. P. ミルズ氏(J. P. Mills)が私に語ったところによると、アッサムではもはや原生林のジャングルは存在しないため、アッサムで行なわれているジュミン耕作の慣習はもはや有害ではなくなったと一般に考えられているとのことである。しかし現在のブータンについてもそうだとはいえない。ジュミン耕作を制御するのはもちろん困難なことだが、ブータン政府は、スン・コシ川流域での全ての耕作を禁止し始めている。スン・コシ川流域では川岸でのジュミン耕作によって森林

が完全に消滅し、洪水時に相当な被害を引き起こしているところがあるからである。

平原に最も近い低山地帯（foothills）の大部分は、流動性の強いネパール人に占められている。彼らは稲とトウモロコシを作るが、牛を飼う余裕のある人はわずかでジュートも作る人も少ない。これは、ジュートは肥料なしでは十分に育たないからである。この地域の住民は、一般に2、3年ほどの間だけ滞在してわずかな金を作るとまたどこか他所へと移動する。近年、新しく開かれたネパールのタライ地方へとたくさんの人が戻ったが、その多くはこの地域からであった。この地域はどこも非常にマラリアが多く、人々は不健康で栄養不足に見える。ジュミン耕作の慣習に直接的に起因する結果として、きちんとした家屋を建てるような手間のかかることはしないので、人々は竹と草でできた非常に原始的な小屋に住んでいる。この小屋は短期間しかもたないが、逆に家族が新たな土地に移動したときには費用もかからず簡単に建てることのできる。この土地は稲とトウモロコシの栽培に向いているが、人々は野性ゾウの略奪行為に大きな損害を被っている。森には野生ゾウは多く、トラも同様に多い。毎年4、5人がゾウに殺されていると私は聞いた。どの農地にも隅には高床の監視台（マチャン）があり、作物が稔る時期には住民は一晩中そこで見張っている。夜間にはゾウを威嚇するために一定の間隔をおいて発砲するのが彼らの習慣である。この地域にはいわゆる塩井が数多くあるが、そこでは、かなり湿った灰色がかかった黒い土のまじった砂が、広いパッチをなして広がっている。この塩は人間が消費するためのものではないが、動物は塩をなめによく塩井に集まる。われわれは、ゾウを含む多くの種類の動物の足跡やふんが残る塩井のそばを通った。真っ暗な夜にはいつもゾウが塩をなめる音が聞こえると私は聞いた。しかし月夜には決してやってこないらしい。

ネパールからの初期の移民のほとんどは、この低山地帯に住み着いた。それは、この地域がゴム採集には最も適していたからである。さらに北方の山地へと彼らが侵入を始めたのは、ゴム採集による儲けが少なくなり、農地が必要となった頃であった。私には、これまでにネパール人によって

ブータン人が後退させられたという問題が起こったとは思われない。ラジャ・ドルジ自身が私に語ったところでは、ブータン人の人口は非常に長い間ずっと一貫して減少傾向にある。彼の考えによると、この理由は相当な割合の男女が宗教施設に入って結婚しないことと、近年増加が激しいといわれる梅毒の流行に求められる。つまり、ネパールからの移住者が山地内部まで侵入し始めた時、そこはすでに人が住んでないか住まなくなった土地となっていた。そして、現在でさえ両者の間にはかなり幅広い帯状の、事実上無人の土地があるのである。ただし、両者はそこを放牧地として使用している。

ある興味深い社会的事実を簡単に記しておこう。初期の移住者がネパールから到着したとき、通常の移民にみられるように彼らは妻を家に残してきた。しかしやがて女たちも到着し、早く到着した者の多くは彼女たちの中から妻を選んだ。その後、元の妻たちは夫らが帰ってこないのを知り、彼らを追ってブータンに来ることにした。その結果、ブータンのネパール人入植者が何人も妻を持っていることは普通である。ネパールではもちろん一夫多妻は認められている。しかし、実際上は、最初の結婚で子供ができなかった場合を除くと、農民の間では一夫一婦婚の方がはるかに一般的なのである。

われわれはある場所ではリンブ族の共同墓地を見せてもらった。そこには東部ネパール出身の入植者で生存している人はもはやいなかったのだが、村長は、住民が死者を葬るときには必ず故地ネパールの方向に顔を向けるという特別な慣習があるのだと教えてくれた。また、彼は死者が大酒のみかヘビースモーカーだったなら墓のそばには少しの酒かタバコを置く習わしがあったが、第一世代の移民の最後の生き残りがなくなってこの慣習は途絶えてしまったとも教えてくれた。どの墓にも石が積み上げられていたが名前はどこも記されていないかった。

スン・コシ川を渡った後、私は再び英領に入った。それに続いた西部地域すなわちチャムルチ地方までの旅行には様々な輸送手段を使ったがここで記述するほどのものでもない。

ブータンのチャムルチすなわちサムチ県は、茶

園の多いジャルパイグリ県 (Jalpaiguri) のちょうど北方にある。東部と違って密林を通ってのアプローチではない。ジャルパイグリ県は何年も前に開拓されて茶園になっているからである。そして、この地域における初期のネパール人移住者は、まさしくこの茶園で容易に仕事が得られたためにこの地方にやって来たのであった。早く到着した者の中に、仲間たちよりもはるかに先見の明のある者が一人いた。彼は、莫大な量の石灰 (lime) がブータンの低山地帯で簡単に採取できることを発見した。その後、彼はこの品物の取り引きをする唯一の特権を手に入れた。彼の事業はかなり成功し、後に彼は現在ネパール人によって占められている西部のほとんど全ての地域における営業許可を獲得することが出来た。許可区域の明確な限界は決められてはいなかったのだが、現在のところ権利の及んでいる範囲は東はパ・チュー川 (Pa Chhu)、西はディナ川 (Dinah) までである。南の限界はむろん英領インド国境であり、北はラプリカ (Raplaka) まで及んでいる。現在、この事業の特権の所有者は最初の所有者の孫である。彼がもつ資格はマハラジャのラルモホール (Lalmohor) に拠っており、この資格は彼とその後継者に永久的に与えられたものである。彼には死刑を宣告することを除く最大限の司法権力が与えられ、ブータン政府に対しては歳入のほんの一部を送金するよう命ぜられたのだった。それ以来、彼の地位はブータンのマハラジャに従属するラジャのようなものとなった。ここでの行政制度も、東部地域で行なわれているのとして変わらないものであった。しかし、移住者がこの地方から出ることを望めば、土地と家屋は特権の所有者の手に渡し、所有者は思い通りにそれを自由に売ることができる。税金は他の地方に比べて幾分高めだが、人々がこの地方に入植してから長い期間が経過しているので他の地方よりは土地の価値はかなり高いであろう。このブータンの一角は、ネパール人の犯罪者が犯罪が露見する前に逃亡できた際の避難所としてもしばしば使われてきたといわれている。なお、ブータンにおける死刑のやり方は、犯罪者を雄牛の皮の中に入れて縫い合わせ、近くの川に投げ込むというものである。彼らによると犯罪を防ぐにはこの方法が最も効果的なのだとい

う。

サムチ県には現在多くのブラーマンがおり、彼らのほとんどはジャイシ・サブ・カースト (Jaisi sub-caste) の者である。原則としてブラーマンは倹約で飲酒も賭事もしない。一方、モンゴロイド系の諸部族は倹約ではないし飲酒や賭事をとがめたりもしない。例えば、彼らはお金があれば使いたがる。このため、グルカ移住者のほとんどがブラーマンに多額の借金をしている。つまり、ブータンにおけるブラーマンの地位はネパールと違い、もはや精神的指導者ではなく金貸しとなっている。その地位はインドの平原部におけるマルワリ (Marwari) に似ている。前貸しの金は収穫物に対する先取権と引き換えに渡されており、利息の率は高い。現在でもネパールではそうであるように、かつてはブラーマンは社会的に上級な地位にあることによって誰からも尊敬されていた。しかしブータンではこの習慣はほとんど崩れてしまっており、現在、彼らが他の人々と違った扱いを受けることはない。また、多くのブータン人も穀物と引き換えにネパール人移住者に前貸しをしている。ドルカ (Dorkha) からデンチュカ (Denchuka) にいたる地域で作られる稲や他の作物は、その地域の人々が必要とする消費量よりもはるかに多く、従って大量の穀物がブータン内部、特に標高の高さに伴う寒冷な気候のために稲ができないハ県へと送られている。この地域の平原にもっとも近いところに住むネパール人の中には、現在かなり大規模に豚を飼育するようになった者がある。この豚は毎週開かれる市場に並べられるが、カルカッタの多くのホテルから来ている代理業者たちには大変な需要がある。

私は、サムチを訪問した後、ハ (Ha) に向かって北に旅を続け、パロ (Paro) で西部ブータンの統治者 (パロ・ペンロップ) に会い、チュンビ溪谷 (Chumbi) とシッキム (Sikkim) を経てインドに戻りたいという考えをもっていた。私は何日かサムチに留まって、現在の特権の所有者であるカジ・ヘムラジ・グルン (Kaji Hemraj Gurung) に挨拶をするとともに、その後のブータン本土旅行の打ち合せをした。パロ・ペンロップ (Paro Penlop) は全く親切にも歓迎の手紙をサムチに送ってくれた。彼は私の訪問に対する全ての準備が

整ったと言ったが、私がなすべきことについては何のヒントも与えなかった。

われわれは3月の終り頃に出発した。平原はすでにほとんど耐えられないほどに暑くなっており、道の悪さにも関わらず内陸部の高地に向かっていることが嬉しかった。ブータンの南の国境の全てに沿って、非常に険しい山地帯が平原の向こうに突然現れる。その勾配は他のヒマラヤ地域のようにゆるやかなものではない。これによって、渓谷は狭く険しく、河川は急流の連続となっている。これらの事実のため、すでに言及したドゥアルは特異な形態をもち、数多くの峡谷を通る他にはこの国に入るのは困難となっている。今回われわれが通過したチャムルチ・ドゥアルはアモ・チュー渓谷（Ammo Chhu）によって形成されているが、自然に造られた驚くべき通り道（gateway）で非常に強力な防御の適所となっている。1865年にブータン人に対する軍事行動がなされたのはこの地域であり、防御側が非常に有利であったということは容易に理解できる。

アモ・チューの渓谷を遡るまともな道はないが、われわれは、苦もなく大石が散在する川岸に沿う道を辿ることができた。私は乗用のラバを与えられたが、その名前はギャモ（Gyamo）つまり「茶色」であると教わった。ラバの持ち主はネパール語を話すブータン人であったが、ラバが岩の間を注意深く進むたびにかけ声をかけていた。「さあ、ギャモ。注意して行け。つまずくなよ。」「あの岩をまわれ。」「ゆっくり歩け、この方を落とすんじゃないぞ！」しかし、こうした注意深い命令にも関わらず、おとなしく従順なギャモはある時私を頭越しに放り投げようとした。だが、けがはなかった。われわれがネパール人集落の本拠であるドルカ（Dorkha）に向かって山を下りる道では、ダマイ（Damai）の音楽家の一団に出会った。彼らは村までわれわれと行進してくれた。組み合わせた大きな楽器を運んでいたリーダーが一種のファンファーレを演奏する度に、このバンドはしょっちゅう立ち止まった。時折彼はバンドの前で一人舞踏（par seul）を演じたので、最後の何マイルかはわれわれはゆっくりとしたペースで進んだ。

ドルカに着くと、どうやら私の訪問をきっかけ

として周囲の村々の人たちが集まる総会が開かれることになったらしいことがわかった。そこは派手に飾られており、私には集まった村長たち向けにスピーチをすることが期待されていた。彼らに会うことは大きな喜びであったが、私はかなり軽装で小人数で旅行中でありこのような公式の場の準備は何もしていなかったのも、その総会ではやや当惑した。パロではこんなことがないよう私は願ったのだったが、いずれにせよ今となってはどうすることもできなかった。私はインドから遠く離れており、あらたに従者も洋服も増やすことなどできなかったからである。

ドルカの人口の多くはライ族（Rai）である。川の対岸のデンチュカ（Denchuka）はリンブー族で占められているが、どちらも東部ネパールの部族である。ここの稲作地はすべて見事な棚田となっており、家は石で頑丈に造られ、屋根は草ぶきであった。ここではジュミン耕作の慣習はなく、従って、住民は恒久的な家屋を建てることに関心がある。人々は非常に明るくしかも裕福なようで、どこでも私は最高級の歓待を受けた。稲刈りのとき、稲はすべてカリ（Khali）と呼ばれる場所に集められる。ライ族もリンブー族もここの地面いっぱいに稲束を広げ、男の子と女の子がこの上で踊って脱穀をする。この時には楽しいお祭りが催され、歌ったり踊ったりして一晩中過ごす。

ネパールでは、かつてほとんどのモンゴロイド系部族が土葬の習慣をもっていたが、正統ヒンドゥー思想が広がったために現在では火葬が普通になった。しかし、ブータンではライ族もリンブー族もまだ土葬をしておりどの村の外にも共同墓地がある。燃料は豊富に得られるにも関わらず、火葬されることは非常にまれである。このことは、移住により住地が変わっても移民のもつ慣習は持続することを示す様々な例の一つである。

ネパール人の他に、この地方には多くのレプチャ族（Lepcha）がおり、その一部はクリスチャンである。また、ダオヤ（Daoya）と自称するごく少数の部族もある。私は1、2人のダオヤ族に会っただけだが、彼らの外見はまさしくモンゴロイド系民族であった。彼らのうちにはネパール語を話す者もあるが、彼らの母語はまず確実にチベット・ビルマ系の言語に属するであろう。というの

も、幾つかの単語が、私がよく知っているこの系統に属する複数の言語のそれと同一であることに気付いたからである。ダオヤ族は毒矢を使ってゾウを殺し、それを食べる。また彼らはイラクサの繊維から服をつくる。彼らは明らかにカーストの規制を受けてはおらず、チベットやブータンに見られるような、家族を越える規模の組織も持たない。彼らの一部はブータン人と通婚するといわれている。ダオヤ族は決して火葬は行わず、非常に浅く掘った墓穴に遺体を安置してその上を広く平らな石で覆う。また、墓のそばには時々お供え物を置く。彼らは全くブーラマンを認めておらず、自らの社会の中にも聖職者はない。私は、彼らについて記述した文献を見つけることはできなかった。外見上、彼らはアッサムのナガ族 (Naga) に多少似ている。彼らは、あるいはそこから来たのかも知れない。

われわれは、到着した時と同じように音楽家の一団に付き添われながらドルカを出発した。この楽団は1マイルほどのところで引き返したが、そこからとたんに人家がまばらになった。最後のネパール人集落はラプリカ (Rapluka) にあり、そこから北にはもはやあのサムチの特権は及んでいない。とはいえ、ラプリカとハ谷の間にある地域は、シェクティナ (Shektina) というブータン人の住む小村を除くと事実上人が住んでいない。そこには濃い森があり、素晴らしい放牧のアルプも混じっている。この放牧地は、ハのブータン人とドルカおよびデンチュカのネパール人双方の放牧地として使われており、山の斜面には羊飼いの仮小屋がいくつも散在していた。この事実上人の住んでいない地域は、ブータン人とネパール人の緩衝地帯もしくは「無住地帯」(no-man's land) となっており、東部地域のネパール人集落の南をタライの森林が画していたのと同様に、ネパール人集落を北側から隔離している。

シェクティナの村にはブータン人の羊飼いが12人ほどしか住んでないが、旅行者には文化の異なる地域に入ったことが直ちに実感される。丸太と草ぶき屋根をもつネパール人の家屋に代わって、ここでは二階建ての家が現れ、割板を並べて大きな石で押さえた屋根が見られる。耕作方法もネパール人のそれとは全く異なり、家屋の周りに

ある雑穀の畑は傾斜を持ちネパール人の畑のようにテラス化されてはいない。

ハ谷に入る前に、われわれはまず標高10,900フィートのセレ・ラ (Sele La) を乗り越さなければならなかった。われわれは放牧地を辿って登って行ったが、そこは紫色のサクラソウと柔らかな緑色のワラビで一面が覆われていた。ほんの2、3日前に通って過ぎてきた湿っぽい森林と比べると、実に奇妙な対照をなす場所であった。峠のてっぺんには新雪があり、冷たい風が吹いていた。われわれは高度を測るのに必要な時間だけそこに留まただけで、ハ谷に向かう雪の積もった道を駆け下りた。ハ谷は平均標高8,000フィートの所にあり、従って決して暑くはない。周りの山の斜面は高く険しい。だから午後の早い時間に日差しは差さなくなる。この4月の上旬の時期、日中、日差しを浴びながら歩くのは快適だったが、早朝と夕方はひどく寒かった。私はこれまで数々のヒマラヤの渓谷を見てきたが、この谷ほどスイスの渓谷 (例えばツェルマットへの道) を思い出させるものはなかった。そしてこの印象は、まさにスイス・アルプスの山荘そっくりの家々を見た時にさらに強くなった。

今や、この訪問の性格について私が抱いていたいかなる疑問も、ついに解決してしまった。ラジャ・ドルジは実に親切にも彼の家を私が自由に使うことを許してくれたのだが、彼の家へと向かって登る小道には地元の役人や生徒たちが列をなして並んでおり、入り口の上には歓迎の言葉を記した大きな旗が立てられていたのだ。私は、へたくそなスピーチをする試練が待ち受けており、私の地味な服装がホストの豪華な錦織の服と比べられてしまうに違いないと感じた。しかしながら、ゾンボン (Dzongpon、県知事) は素晴らしい魅力のある人であった。彼はカルカッタ大学出身であり、彼がその相当な英語の知識を試す機会を得たことで、異邦人である私の他の欠点が補われることがすぐに明らかになった。ブータン人は仏教徒であるためカースト制度による規制を受けないので、われわれと一緒に食事を取ることができた。そして、ヒマラヤの他の多くの地方では全く不可能なほどの親密な関係を築くことが可能だったのである。このハ谷はカリンボン (Kalimpong) の

ブータン代表（the Bhutanese Agent）であるラジャ・ドルジ個人の地所の一部であり、数年間に及んで大成功のうちに続行されてきたすぐれた教育的実験も、やはり主に彼による。彼自身は、ダージリンの聖ポール学院（St. Paul's school）で教育を受けたが、次のことに早くから気付いていた。つまり、ブータンは現代の西歐式教育を受けた人を必要としてはいるが、この国に特有のニーズにみあった教育が自国語によって行われなければならないというのである。学校には寄宿舎に生活している約30人の少年がおり、彼らはここで大学入試レベルまでの教育を受けている。そして、やがては国が必要とする色々な専門職、つまり医学、林学、農学の知識を身につけることが期待されている。先見の明によって、生徒の数は、現在国家が収容しうる人員（trained men）の数に厳しく制限されており、初期教育の間、少年たちは最終的に配属されるであろう役職に関係する人々に常に親しく接する。特にこの点では、この学校は英領インドのどの学校よりもすぐれた教育を施している。すでに述べたハのゾンポンは非常にすぐれた教育を受けた人であるが、彼自身このような方式で初期教育を受けていたならば、もっと国のために役立っていたに違いないはずだと強く悟っているのである。彼は、「私はアフリカの地図を覚えていて描くことができる。しかし、このことがブータンで何の役に立つのか。ここでは、農業の方法について私が無知であることの方が、はるかに大きなハンディキャップなのだ。」と私に話した。

パロに着くのにわれわれは最初にチ・レイ・ラ（Chi Lai La）を越えた。この峠は標高12,200フィートであったが、登りの傾斜は非常に緩やかで何の困難もなかった。上方の斜面では家畜ヤクの群れが草をはんでいたが、近づこうとするとひどく腹を立てた。峠のパロ側へと少し下ると、チャン・ナ・ナ（Chang na na）という場所にペンロップ（Penrop）が建てた小さなバンガローがあった。私は、彼の特別な要望に従ってこの快適な森の開拓地で一夜を過ごすことにした。この要望は、私がそこへ到着するやいなやペンロップの代表者たちから伝えられたのだった。彼らは手紙と歓迎のスカーフ、それに相当な量のリキュールとオレンジをかたく封をされた入れ物に入れて持ってき

た。われわれは翌朝早くに出発したが、私の地味な従者にペンロップの家臣たちが加わって絵のような行列となった。われわれが数マイル進むと、道ばたには私のための食事が広げられており、酒とオレンジがさらに補給された。この驚くべき歓迎の意思表示は道に沿って所々で繰り返された。私は今や数カ月間まに合うオレンジを持っており、お酒の方は集まった人々に毎度配ったが、それは彼ら全員をお祭気分にするのに十分であった。この気前のよい歓迎の表現とそれに対して十分なお返しができないことに私はすでにかなり当惑していたので、私は従者の様子をみてたいへん安心した。というのも、実を言えばペンロップから贈られた特別に醸造された酒は暑い日中に飲むのには適さなかったからだ！しかし、クライマックスはまだ先であった。パロから少し離れたところには、ペンロップの個人ボディガードがわれわれを待っていたのだ。彼らが持ってきていたのは私が乗るための豪華に飾られたラバ1頭と小さな携帯用の大砲1つであった。われわれはゆっくりと進んだが、一行の数は家を通るたびに大きくなっていった。所々で行列全体は立ち止まり、召使が短い踊りを披露したり、古めかしい大砲に火薬を詰めたりした。私は爆発の前にラバから下りようと準備していたが、ラバはその爆発にはよく慣れていると告げられた。そして実際そのとおりであった。もはや私は、中世の野外劇の主役のようになっていたが、運悪く私はここにはふさわしくない20世紀の平服を着てしまっていた。私は、この場には何か幻想的な服がふさわしいだろうと思った。そんなことを考えながら川岸に着いて私はラバから下りた。するとそこには非常に快適なキャンプが贅沢な規模で準備されていた。

直ちに私は、歓迎に対する礼を述べるためにペンロップを訪ねようと決めた。私の意向はいくらか彼にとどいたに違いない。というのも、彼はまさしく東洋的な優美な作法に則って、私に先んじてまずこちらを訪問することにしたからである。彼は本当に魅力的な人で、私の歓迎に関するすべての疑問は解決した。彼は外の世界から来た人に会えたことを本当に喜んだ様子で、長い間留まって話をした。そして彼が出て行く前に、翌日私が彼と一緒に食事をして毎年この時期に行なわれる

踊りを見ることを打ち合わせた。

パロの大きな踊りは毎年春の初め頃に催され、ふつうまる3日間続く。これは、もっぱらパロのゾン（Dzong）に属する僧院に住む僧侶たちによって実行され、1年のうち何ヶ月の間は大変な練習が必要に違いないと私は想像する。というのも、演技の間中ほんのわずかのためらいや間違いすら無かったようだったからだ。当日の朝、周囲のすべての村の人々は非常に早くから家を出て集まってきた。ほとんどの人はあざやかな赤や黄色をした晴れ着を着ており、多くの人は3日間ずっと滞在するのに必要な食事や酒を持参していた。パフォーマンスは10時に始められる予定で、その少し前に私はペンロップのそばの席へと案内された。踊りはゾンの内部の中庭で行なわれたが、そこは四方を何階もある建物で囲まれており、その一階部分には中庭側に広いベランダがつくり付けられていた。これらのベランダのいくつかは高位の見物人や僧院の高僧たちのためのもので、その他のベランダは演技する人たちの更衣室に使われていた。この四周はすべてごった返していて、民衆は祭りの雰囲気包まれていた。多くの見物人にとってはヨーロッパ人を見るのは初めてだっただろうけれども、ピカデリー街で英国人が注視されないのと同じように、私が特別に注目されることはなかったのでホッとした。

10時きっかりにシンバルがガラガラとなり、色あせたヤクの毛で作られた幕が開かれた。そしてペンロップの宮廷の役人や僧院の年長者からなる行列がゆっくりと入ってきた。みな豪華な錦織や絹のローブを着ていた。僧侶の多くは大きな太鼓を運んでおり、行列が中庭をゆっくりまわる間にそれをリズムカルに叩いていた。その次に踊り手が入ってきた。彼らはみな僧侶か見習い僧で人数は50人かそこらであった。何人かはピーコック・ブルーの錦織の服を着て、孔雀の羽が一つのせてあるつば広の黒帽をかぶっており、残りは色とりどりの衣装を着て実に風変りな仮面を付けていた。色々な仮面の一団があったが、人間のどくろを表わした仮面や、ヤクや牛を表わした仮面があった。農場のいろんな家畜が化けて出たような仮面をかぶった一団もいた。それは、アリスか白騎士がいつ出てきてもおかしくないとすら感じられ

るほどだった。まもなく中庭は人で溢れ、踊っている踊り手以外の人は皆引き下がった。

私は最初に黒帽の踊りを見た。これはチベットを旅行した人たちが何度も記録してきたもので、チベットでは多くの僧院で見られるようである。この踊りはピーコック・ブルーのローブを着た僧侶たちが踊った。その踊りは、少しステップを踏むごとに複雑な回転を加えて舞台をゆっくりとまわるもので構成されている。正確な腰の動きによって、踊り手はローブのたくさんの折り目を体から外側にちゃんと立ったようにし続けることができる。また、長いリボン飾りをうまく使ってもっと優美な演技をした別の踊り手もあった。この演技は、他の踊りもそうなのだが、少しの間見るには実に興味深いものであった。しかし、個々の演技はどれも2時間ぐらいの間少しの休みもなく行なわれたので、時間が経つにつれこの見せ物は少しずつ退屈なものになった。これらの踊りは非常に疲れるものだと思える人がいるだろうが、実際には暑い太陽のもとで休憩無しで2時間踊っても演技者たちは少しも疲れた様子を見せなかった。

踊りはすべて僧院の楽団の伴奏で行なわれた。いくつかの種類の太鼓やフルートのような楽器に加えて非常に長いトランペットもあった。このトランペットはずっと鳴っていたのではなく、他の音楽のリズムカルさとは対照をなしていた。この音は非常に深く、実際の音楽の音よりも振動が大きかった。この長いトランペットは1音しか出せない。そして演奏するのが難しいといわれ、きわめて強い肺を持つ人だけが音を出すことができるのである。楽団の前には見習い僧全員が座っていたが、その多くはまだ7、8才の少年であった。彼らは明かにパフォーマンスを楽しんでいたが、彼らが宗教的に重大な意味をもつ場面を見失わないように、かなり年配の僧侶がときおり結び目のある鞭を彼らの顔の前で振り回して注意を引き戻していた。少しの間なら彼らは夢中になって踊りを見ているがすぐに視線はそれてしまい、ほどなく彼らは再び彼ら同志で笑ったり話したりし始めるのだった。

黒帽の踊りの次に他の踊りが行なわれたが、紙数がないのでここでは省略する。完全に仮面を付

けての踊りもあれば、アラビアで一般的に使われているターバンとよく似た頭飾りを付けての踊りもあった。特に、ある踊りは春と関連した意味をもつように見えたが、実際には誰もそのようには説明しなかった。この踊りでは、より儀式的な踊りには欠くことができないと考えられる型にはまった動きはなかったのだが、踊り手はみな新鮮な緑の葉の冠をかぶっていた（この緑の葉については例えばフレイザー『金枝篇』簡約版第28章、296-323頁を参照のこと）。踊りは休みなく夜遅くまで続けられ、その夜村人たちの多くはゾンにキャンプをはった。

次の日すべてのパフォーマンスが繰り返された。この時にはゾンの中に入れなかった人々が見られるようにと城塞の外側の広場でお祭りが行なわれた。そしてベンロップの宮廷の役人だけでなく僧院の人々全員からなる行列がお祭りを先導した。ラマたちはみな深い栗色のローブを着ていた。この行列の目的はチベットから来訪した高位の僧侶に敬意を表し、彼を公式にパフォーマンスへ招待するためである。私は彼と話をする機会はなかったが、彼は隣の建物の二階の彼の席に向かうときに私に友好的に笑いかけてくれた。この見晴らしの良いところから彼は薄い網戸越しに踊りを見ていた。踊りはまた1日中行なわれ、太陽が遠くの丘の後ろに沈んでしまってから、ようやく見物人の多くが家へと出発した。その夜おそく私は川岸に沿って最後の散歩をした。ゾンの壁が曇りがかった月光にはの白く光ったが、どの窓にも明りはなかった。どこか遠くの中二階からあの長いトランペットのしみ入るような音が聞こえてきた。どうやらこの日の最後の儀式が行なわれたようだ。まもなくその音も消え、水が川床の石に当たる響きだけが聞こえた。私は向きをかえて戻って行った。

パロを出発した後、私はもと来た道をハに引き返し、そしてハからハ・ラ（Ha La、13,900フィート）を越えてチュンビ（Chumbi）に向かった。4月の半ばだというのに、ヤトウン（Yatung）は身を切るような寒さで少し雪が降っていた。私は直ちにシッキムに向かうことにし、チュンビには輸送手段を集める間だけとどまった。チュンビからナトゥ・ラ（Natu La）を通してシッキムに続

く道はほとんど観光者の道である。そこは何百人もの旅行者が通過してきた。われわれがヤトウンを出発したときは雨が降っていて非常に寒かった。すぐに雨が雪に変わり、やっとのことでその晩おそくにチャンピタン（Champitang）に着いた。雪は降り続いて次の晩までにバンガローの周りには約4フィート積もった。進み続けるのは不可能に思えたが、2、3日後にわれわれは峠越えに挑むことにした。荷役用のラバの食料が乏しくなってきたからである。われわれは強風のなかを出発したが、前方はまったく見えなかった。4月16日の日記に私はこう記した。「ナトゥ・ラを6:30に越えて、夕方の5:30にツォムゴ（Tsomgo）に着いた。道中はほとんど吹雪だった。大変な一日だった」。次の日の夕方われわれはガントック（Gangtok）に着き、そこからダーズリンまで自動車の旅を続けた。

ーディスカッションー

この論文が読まれる前に、会長（Major-General Sir Percy Cox）は次のように挨拶をした。『閣下、そして紳士淑女の皆様、今夜「ブータンの旅」という論文を読まれるモーリス少佐は、われわれの知らない方ではありません。彼には既にエオリアン・ホール（Aeolian Hall）で2回講演をいただいております。1923年の「ネパールの旅」と1928年の「フンザーナガル地方の旅」であります。また、このホールのオープニングのとき、彼は第二次エベレスト遠征隊のメンバーとしてこの演壇で話された一人なのです。彼はすぐれた講演者で非常に優れた写真家でもあります。ですから、きっと皆さんはこの夕べを楽しく過ごすことができることでしょう。彼は、これから話される旅行を1933年の3月に実行されました。近々彼はインド、ネパール、それからヒマラヤへと戻られる予定ですので、私たちは将来再び彼の話聞くのを楽しみにしていきましょう。申しましたように、今夜は彼はブータンについて話されます。』

続いてモーリス少佐が上記のとりの論文を読まれ、ディスカッションが行なわれた。

会長：『ツェットランド卿、講演者はあなたのこ

の地域との関係について言及されましたが、あなたがベンガル総督に就いておられたときになされたブータンの地方遠征について、その観察結果を聞かせていただけないか。』

ツェットランド侯：『申すまでもなく、私はモーリス少佐の論文を非常に興味をもって聞きました。というのも、今夜彼が述べられた場所の多くを私は旅行したからです。彼が何枚かの素晴らしい写真で見せてくれた、パロ・ゾンでの驚くべき音楽と踊りと酒のパフォーマンスを実見しました。好意的にもてなしてくれるブータンの人々が、特別な客人（私がこういうのはおかしいのですが）のために催すといつて聞かなかったあの儀式上の行列に、私は参加しました。そして、やはりモーリス少佐と同じように、その国のワインを飲みました。』

シッキムを訪れたことのある方は憶えておられるでしょうが、マルワ（Marwa）というその国のワインは、発酵した雑穀のはいった容器に熱湯を注いで作られます⁵⁾。熱湯は同じ容器に何回も注ぐことができ、初心者ならば最初はアルコールの含まれてない飲み物と間違えるかもしれません。私と私の連れ合いの場合（彼女は熱心な絶対禁酒者なのですが）、これが本当にお酒であるかどうかという疑問は、ある日思いがけなく解決しました。それは、あるシッキムの村の、好意的にもてなしてくれる村長がくれたマルワを飲んでいた時のことでした。われわれは話し込んで、「雑穀の入った容器にいったい何回熱湯を注ぐのですか？」と尋ねました。すると、彼らは「ああ、何回もですよ」と答えました。続いて「それが終わったら雑穀はどうするのですか？」ときくと、「雑穀は豚に与える」との答えでした。そして、それを教えてくれた人はわれわれをじっと見つめ、物思いにふけりながら全く好意的にも「豚も酔っぱらいますよ」とつけ加えました。

モーリス少佐はドゥアールの不健康性について話されましたが、ベンガルとブータンを含む山地国家との国境に沿った起伏の多い地域は、本当に熱病の多いところなのです。ベンガルの平原ではマラリアの媒介となるのは *Anopheles fuliginosus* という蚊です。この種の蚊はよどんだ水にだけ生育しています。そのため、川の水がよどむことな

く流れているドゥアールの起伏の多い地域まで来れば、もはやこのマラリア蚊の活動域をこえて安全な所に達したと考える人があるかもしれません。しかし、不幸なことにそこには *Anopheles listoni* という別の種類の蚊がいて同じようにマラリアの寄生虫を運び、しかも神の造られた不幸な摂理によってこの蚊はよどんだ水ではなく流れる水に生育するのです。これによってドゥアールがマラリアの多い土地となっているのです。

しかし、私がブータンに入ったのはドゥアールからではありません。実際には、モーリス少佐がブータンを出てチュンビ溪谷に行くときに通ったハ・ラ（Ha La）からはかなり北よりのルートからこの国に入ったのです。細かく言うとパリ（Phari）からパリの高原（Phari table-land）へ進み、テモ・ラ（Tremo La）という峠を通過してブータンに入ったのです。テモ・ラは標高約16,500フィートの峠で、そこからはブータン人がチョ・タ・ケ（Cho-tra-ke）つまり「割れた岩の神」と呼ぶ白い高峰を仰ぎ見ることができます。そこからはパ・チュー（Pa Chhu）すなわちパロ川を下ってパロに至ったのです。

さて、西部ブータンには人々の心を打つことが2つあります。1つはモーリス少佐が論文に記され、特に写真のかたちで持ち帰られたってこれた物、つまり堅固でどっしりとした西部ブータンの主要な建築物であります。私が最初にパ・チューを横断したとき、モーリス少佐の写真にあるのと同じように頑丈に取り付けられた橋を通りました。その両端は石の塔に支えられており、実に素晴らしい技術（私には片持ち梁方式に見えた）を用いて造られていました。

私はパ・チューをある程度下ったところでドゥゲ・ゾン（Duggye Dzong）というブータンで最も古いことで有名な巨大な封建時代の城に至りましたが、その構造は、わが国の12世紀の封建時代の城の楼門、入口、城壁、本丸などに実によく似ていることに気がつきました。

そして、旅行者の心を打つと思われる第2の点は、私が判断する限り、西部ブータンには、われわれ自身の歴史において時代を画すことで知られる特徴である封建制度に非常によく似た社会制度が現存しているということだと思います。ドゥ

ゲ・ゾン自体は広大な建物でありましたが、それでさえパロ・ゾン（Paro Dzong）の巨大さの前ではまったく見劣りがしました。皆さんが今夜写真に見られたように、パロ・ゾンは石灰を塗られた石造りの巨大な四角形の城であり、それを大きな差しかけ屋根のひさしが覆っています。私が訪れたときにはパロ・ゾンの城の実際の人口は300人であると教わりました。われわれの国の12世紀に戻ったような印象は、ペンロップ（Penlop）すなわち西部ブータンの統治者が私のために催してくれた弓の試合によって一層強くなりました。ロックスレイ（Locksley）によく似たある優れた弓の射手は、試合に参加するためにブータンの遠い地方からやってきていました。的は約120歩の距離のある競技場の両端に置かれ、射手たちは矢が弓から放たれるやいなや矢が的に正確に当たるように荒々しく叫ぶのです。残念ながら、その効果はなかなか証明されませんでした。私はこの行動は必要不可欠のものだということに気がしました。なぜなら、喜ばしいことに、また私にとっては驚いたことに、ついには周りに集まった群衆の目前である射手が的に中心を射ることに成功したからです。そして、夕暮れになるまでその行事は続きました。

パロから私は今夜モーリス少佐が説明されたのと同じ道（もちろん方向は逆でしたが）を通して、ラジャ・ソナム・トブゲイ・ドルジのブータン国内の居住地であるハで少し時を過ごしました。彼は、立派なブータン代表であり、ブータン政府とインド政府の間の全ての公式書簡は彼を通してやり取りされています。私は、モーリス少佐がトブゲイ・ドルジの能力と魅力に対して述べた賛辞に共感します。

もともと私の訪問時にトブゲイ・ドルジが始めていた実験的教育について、モーリス少佐が敬意を持って述べられたのを聞いて私はたいへん嬉しく思いました。カリンボンのグラハム博士とサザーランド博士（Drs. Graham and Sutherland）の助言によってその計画を発案し、またその詳細を実行に移したときの熱意がいかに大きなものであったかについて、私はよく憶えています。

ハから先は、私はモーリス少佐が入国する時に通ったのと同じ道、つまり南部ブータンのネパー

ル人が住む地域を横切る道を通して再びベンガルに戻りました。写真から判断する限り、同じドゥアール（いま皆さんが写真で見たチャムルチ・ドゥアール）を通ったのだと思います。

最後にもう一度いいたいのは、この講演を聞いて私は本当に楽しかったということです。この講演は、たくさんの楽しい思い出を蘇らせてくれたのです。』

会長：『紳士淑女の皆さん、われわれはまったく幸運にも今夜ツェットランド卿と共に過ごすことができました。この演壇で彼に会えて本当に楽しかったというのが皆さんの感想でしょう。われわれは、また度々彼に会う機会があることを願います。』

私は、講演者に一つ質問したいことがあります。彼は写真にあった仮面は中国に起源をもつものではないかと話されました。私は彼がチベットのレー（Leh）方面¹⁾に行ったことがあるかどうか知りませんが、もし彼にその経験があったなら中国起源のものともみなすかどうか。私はそれはチベット起源のものではないかと思ってきましたが。』

モーリス少佐：『私は、どちらかといえば違うものだと思います。』

会長：『私は、その国の人たちは仮面が中国から来たと考えているのだと思います。今夜ここにこの国を知っている他の話し手がおられるかどうか分かりませんが…。おられなければ、私にできることは皆さんと一緒にこの講演者にただただお礼を述べることであります。特に変わったことを経験された彼の、お話と素晴らしい写真はたいへん興味深いものでした。これらは非常に貴重なものに違いありません。モーリス少佐には人類学方面の素質があり、ネパールやこのブータンの旅行では、彼は現地の人々の間で特に人類学の研究に専念されました。私は、皆さんとともに彼の素晴らしい論文と実にすぐれた写真に対して心からお礼を述べたいと思います。』

訳注

1) K. C. I. E.すなわち Knigt Commander of the Indian

Empireとは、英国傘下に入ったインド各地のマハラジャに英国側が与えた称号である。

- 2) タシ・チョ・ゾンとは、国の首都（夏の都）ティンブーにある中央政府の名前である。
- 3) 著者は、ネパール系住民の総称としてグルカという言葉を使っている。
- 4) 1アンナは1/16ルピー。
- 5) この酒は、シコクピエからつくるトンパと呼ばれる酒のこと。なお、マルワというのはヒンドウスタン平原の一部の言語でシコクピエを指す語である。
- 6) ラダック地方のこと。

訳者あとがき

文中からも伺えるように、著者のモーリスはグルカ・ライフルに属していた軍人であるとともに、探検家、人類学者という側面をも併せもった人であった。将校としてグルカ兵と接していたことによってネパールの諸民族については特に詳しく、例えば、このブータン旅行を行った年にはそれに関する著書（Morris 1933）も出版している。つまりこの報告は、1930年代当時の英領インド関係者のうちでももっともネパールの諸民族に詳しく、人物が、ブータン南部へ移住していたネパール系住民と、彼らとブータン人との関係を観察した記録といえる。

さて、論文の中に現れる若干の現地語と諸民族の名前とについて必要最少限の解説を加えて読者の便に供しておこう。

まず、文中に現れるブータン語であるが、ラ（La）は峠、チュー（Chu、またはChhu）は川を意味する。ペンロップとはゾンボン（県知事、藩主、城主）の上に立つ統治者であり、パロ・ペンロップ、トンサ・ペンロップ、ダガ・ペンロップなどがあつた。当時有力であつたペンロップはトンサ・ペンロップとパロ・ペンロップであり、実質上それぞれが東部ブータン、西部ブータンの統治者であつた。文中にあるように、ブータン全土の王（ギャルポ）はトンサ・ペンロップであつた（現国王の場合でも王位を継承する前にトンサ・ペンロップに就任した）。また、ゾン（Dzong）とは各地方の首邑にある城塞のことであり、政庁と僧院双方の機能を持っている。

次に民族名であるが、グルン、ライ、リンブーなどは、主に東部ネパールを中心に分布するチベット・ビルマ語系の民族であり、文中に見られるように当時すでに一定程度ヒンドゥー化していた。ブラーマン、ダマイは、彼らよりも西方に起源をもちネパールにおいて支配的なパルパテ・ヒンドゥー（山地ヒンドゥー、インド・アーリア系）のカースト名である。メチは、主にアッサムの平原部に分布する少数民族（チベット・ビルマ語系）で、いわゆるカチャリ族の一員と考えられている。サンタルはインドに比較的広く分布するオーストロ・アジア系の民族である。ナガ（ナガ諸族）は、東部アッサムのナガ山地に住むチベット・ビルマ系の民族である。モーリスが「発見」してダオヤと記録している少数民族は、栗田（1986）やアリス（Aris 1979）が記しているブータン西南部の少数民族のどれかに対応すると思われる。

なお、文中に頻繁に現れるdistrictという語は、行政区としての県を指していると考えられる場合と地理的な広がりをもつ地方または地域を指している場合がある。また、後者に相当する語としてはarea, tract, land, regionなども現れている。手元の資料では1930年代当時のブータン国内の正確な行政区分を確認することができないが、とりあえず、サムチ、チラン、ハ、パロなどに関しては、文中のdistrictが現状の行政区にある県（Dzongkhag, ゾンカック）のようなものと解釈できる場合には県という語をあてて訳しておいた。

また、原文に含まれていた文献の脚注は、本文中に（ ）で囲んで入れた。

Aris, Michael (1979) Bhutan: the Early History of a Himalayan Kingdom, Aris & Phillips Ltd., Warminster, England, pp. xvii-xviii.

栗田靖之 (1986) ブータン・ヒマラヤの生業形態の多様性、国立民族学博物館研究報告、11(2): 457-488.

Morris, C. J. (1933) Hand Books for the Indian Army: Gorkhas, reprint 1985 by B. R. Publishing Corporation, Delhi, under the title The Gurkhas: an Ethnology.